

# 盲児の言語指導に関する研究

## — インリアルによる事例報告 —

内 田 芳 夫・飯 野 容 子\*

(1987年10月13日 受理)

### I. は じ め に

インリアル (Inter Reactive Learning and Communication の略, INREAL) は 1974 年米国コロラド大学で, Weiss, R. を中心に言語障害幼児の二次障害早期予防プログラムとして開発された方法である。そして, 1984 年以降, インリアルはコミュニケーションに基礎をおく学習促進法として位置づけられ, 従来の話しことばに限定しない読みや書きことばの学習援助法として, さらに, 家族内力動的観点からの両親指導などの実践が試みられてきている。日本においては, 大阪教育大学の竹田契一博士を中心とする研究グループが 1981 年以降, 「ことばの遅れた子どもへの言語指導<sup>3)</sup>」や「インリアル・セラピーによる母親指導の試み<sup>1)</sup>」など一連の研究論文を発表している。また, 筆者ら (1984<sup>2)</sup>), (1986<sup>6)</sup>) は障害児のことばの指導方法としてインリアルを導入した理由として, ① 子どもにとって最も自然な活動である遊びの形態で行われること, ② 発語のみられない子どもから適用できること, ③ 子どものコミュニケーション能力を高めるばかりでなく療育者のレベルアップを促すことができることの三点を指摘し, インリアルによる発達遅滞児の言語指導の臨床も試みた。しかし, インリアルによる臨床例は限られており, 今後, 子どもの年齢や障害種別に応じたアプローチを試みインリアル適用の有効性と限界について明らかにする必要がある。

そこで, 本研究は療育相談で出会ったひとりの盲幼児に対することばの指導の手がかりを得るために実用論的アプローチを理論的背景とするインリアルを実施し, 本邦では報告事例のない盲幼児への適用の可能性について吟味することを目的とする。

### II. 方 法

#### 1. 対 象

事例 K.D. (1984 年 7 月 26 日生, 男児), 来談時 1 歳 6 カ月

---

\* 福岡教育大学大学院  
鹿児島大学教育学部障害児教育学科

① 家族構成：父，母，姉（4歳）と兄と本児（兄と双生児で兄は健常児）

② 生育歴：出生時体重 1,125 g，仮死状態で出生，保育器に 2 カ月間入る。生後 1 カ月時に光凝固手術を受ける。生後 10 カ月時に失明の危険が高いことを宣告され来談時には光覚反応も認められない全盲状態である。発育経過は定頸（4 カ月），這行（1 歳 3 カ月），支え歩き（1 歳 4 カ月），人見知り（1 歳 6 カ月），始語（1 歳 8 カ月），始歩（1 歳 11 カ月）。

③ 主訴：うずくまっていて遊ぶことが少ないので遊びの経験を多くさせたい，また発語がないので，ことばの指導をしてほしい（母親の供述）。

## 2. 方法

1986 年 4 月（1 歳 8 カ月）から同年 12 月（2 歳 4 カ月）まで，週 1 回，K 大プレイルームにおいてインリアルによることばの指導を試みた。療育回数は 12 回で 1 回のかかわりは 30 分間とし，遊び場を VTR に記録し分析した。なお，療育過程を 4 期（第 I 期は 1 歳 8 カ月から 1 歳 10 カ月，以下，2 カ月ごとに時期区分をした）に分け，各期ごとに任意に 1 回の療育場面を抽出し，計 4 回の継時的変化について検討した。

インリアルによる指導では，前言語期にある本児に対し特に，① 大人が子どもの行動や動作を模倣するミラリング (Mirroring)，② 子どもと並行遊びしながら子どもの考えや行動を言語化するパラレルトーク (Parallel talk)，③ 大人が自分の行動を子どもの言語レベルに合わせて言語化するセルフトーク (Self talk) などの技法を取り入れ，相互交渉が展開できるようにかかわった。分析については，① 相互交渉過程の継時的変化，② 子どもの意図的伝達行動の出現率，③ 大人の行動傾向，④ 子どもの探索活動および遊びの変化の 4 つの視点から整理し考察を加える。

○---○ Cini 短パターン  
△---△ Aini 短パターン  
●---● Cini 長パターン  
▲---▲ Aini 長パターン

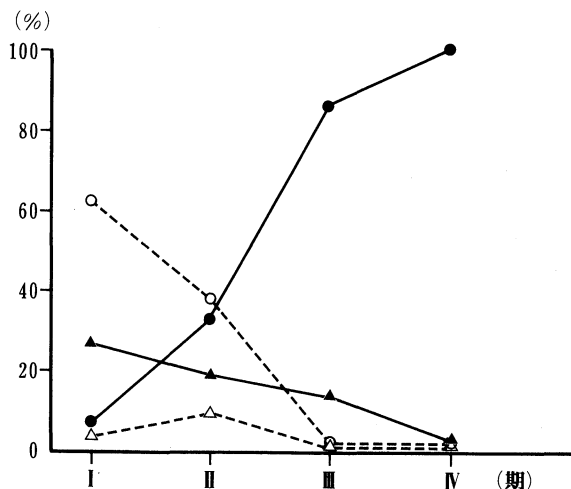


図1 相互作用ユニットパターン (長・短) と Ini (A・C) の割合

## III. 結果と考察

### 1. 相互交渉過程の継時的変化 (図1)

図1は大人と子どもの相互交渉 (35回) の相互作用ユニットを大人の開始 (Adult initiative, Aini と略す) と子どもの開始 (Child initiative, Cini と略す) に分け，さらに辰野ら (1979)<sup>5)</sup> の相互作用ユニットのパターンに基づき，短パターンと長パターンに分け，① Aini 短パターン，② Aini 長パターン，③ Cini 短パターン，④ Cini 長パターンの4つのパターンの継時的変化の割合を示したものである。

第Ⅰ期(第1回)の相互作用行動では, 子どもから開始されるのが全体の約70%を占め, そのうちの約90%が短パターンであった。このことは子どもに主導権を与えてはいるが, 大人は受動的に対応しているにとどまり相互交渉が成立しない状態と言える。第Ⅱ期(第6回)では, 子どもの開始行動による短パターンが減少し, 長パターンの増加がみられる。子どもの開始による長パターンの相互作用ユニットは第Ⅰ期と第Ⅱ期の間で危険率1%水準で有意差が認められた。このことは大人が子どものコミュニケーション行動の意図を読み取れるようになり, 相互交渉が成立し始めたと考えられる。第Ⅲ期(第10回)以降では, 子ども, 大人とも相互作用ユニットの短パターンがみられなくなり, 子どもの開始行動による長パターンの意味ある増加が認められる。この事実は子どもの主導権のもとに遊びが展開され, 両者とも互いの行動を受けとめる力を獲得し相互に反応できる水準に達したことを物語るものである。

## 2. 子どもの意図的伝達行動の出現率 (図2)

意図的伝達行動の出現率は場面内の全行動数のなかの意図的伝達行動の比率を算出したものである。第Ⅰ期における意図的伝達行動の出現率が39%と低い背景には, うつ伏せ姿勢が多く発声が少ない子どもの行動状況から行動意図を読み取ることが困難であったためと考えられる。しかし, 第Ⅱ期以降, 意図的伝達行動が高まった理由としては, ①大人が子どもの行動の意図や意味を読み取り, タイミングよくかかわることができたこと, ②子どもの変化として, 発声と動作を結びつけた意図的伝達行動が出現し始めたこととが相乗的に作用したためと考えられる(なお, 第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけての出現率の増加は危険率1%水準で有意差が認められた)。

## 3. 大人の行動傾向の分析 (図3)

場面内の大人の行動内容を竹田(1983)<sup>4)</sup>の5つの観点(①無視, 無反応, ②指示的, ③受動的受容, ④能動的受容, ⑤展開, 解釈的)から整理し検討した。

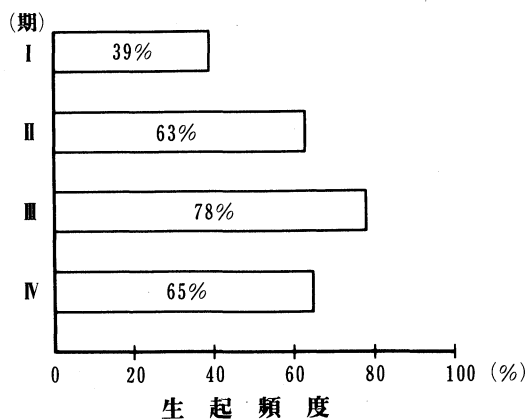


図2 D児の意図的伝達行動の出現率

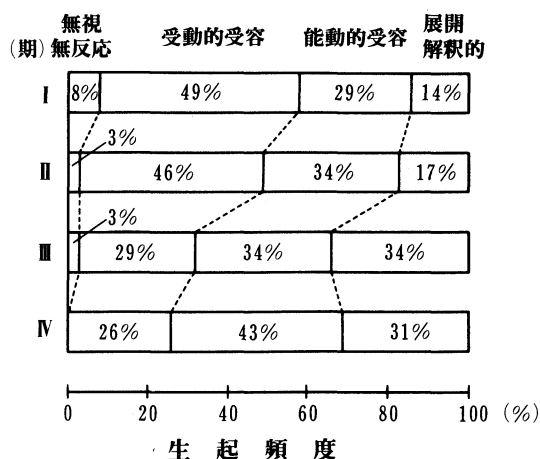


図3 大人の行動傾向

全期を通して指摘できることは、① 受動的受容が第I期の49%から第IV期では26%と減少していること(危険率5%水準で有意差が認められた)、② 展開、解釈的行動(子どもの行動意図を解釈し展開させること)や能動的受容(子どもの行動意図を受容しつつ積極的に働きかけること)が増加していることである。なお、今回の分析では指示的行動はみられなかった。

さらに、言語心理学的技法では話しことば獲得前期の本児に対し、「バンバン」、「パタパタ」のような音声語を中心としたパラレルトークやミラリング(セルフトークを併用しながら)を用いながら、触覚系や聴覚系に働きかけることを多く行った。また、「タッタ」、「アンヨ」のような動作語によるパラレルトークで対応することも試みた。

#### 4. 子どもの探索活動および遊びの変化

##### (1) 探索活動の変化

かかわりの初期の段階では、うつ伏せ姿勢のままうずくまりがちで、両手を両眼に押しあてるなど外界を受けとめにくい状態がみられた。しかし、次第に他者との関係や事物との関係が成立するにつれて、坐位姿勢で手を出す、足で触れる、なめるなどの行動が現れるようになった。また、中期から後期にかけてハイハイや立位姿勢による移動がみられ行動空間の拡大とともに身の回りの事物に対し、全身で触れるなど能動的な探索活動が出現するようになった。

##### (2) 遊びの変化

第I期(1歳8カ月～1歳10カ月): うずくまりがちな本児に対し音の出るおもちゃで誘いかけると近づき、手でおもちゃを捜しあて両手で振る、なめる、かむなどの行動がみられる。また、大人との追いかけごっこをハイハイしながら喜んでする。

第II期(1歳10カ月～2歳0カ月): プレイルームの床やカーペット、ノブなどに興味を示し、手、足、口などで繰り返し触れる。また、ハイハイや伝い歩きしながら空内を探索する。風の感触、くすぐり遊び、キーボードでの音出し遊びなどを好む。

第III期(2歳0カ月～2歳2カ月): 大人と一緒に大きなボールを押して遊ぶ(ある物を共有して遊ぶことが増える)。大人との応答的な発声が見られる。

第IV期(2歳2カ月～2歳4カ月): 自力で歩行し探索し始める。大人と空間を隔てて大きなボールをころがして遊ぶことができる。

主な遊びの内容とそのようすについて概観してみたが、以下、ボールを介した遊びに焦点をあてて子どもの遊びの変化について考察してみたい。

初期の段階では、ボールをたたく、なでる、なめるなどの直接的行為が支配的であった。また、母子分離が不安定な時期でもあった。そこで、大人は子どもの隣に並び子どもの行為を模倣(ミラリング)し、言語的な働きかけ(パラレルトーク)を積極的に試みたところ、ミラリングすることを期待する行動が子どもに出現するようになった。これはミラリングやパラレルトークを用いて、触覚系や聴覚系を介して子どもの行為をフィードバックしてやることによって、子どもは自己の行為

を対象化でき、同時に遊びに介在する大人を意識できるようになったものと考えられる。

中期の段階では、大人の行為に関心を寄せ行為を模倣したり、本児のイニシアチブのもとにボールを媒介とした遊びが展開できるようになった。つまり、本児は物と自己との関係を学習し積極的に大人を誘い出し、状況を共有して遊ぶことができるようになったと言える。

後期の段階では、「ボールが放れると本児は要求のサインを出し、そのサインを大人が読み取りボールを渡す」という一連のやりとり遊びが出現するようになった。これは、自己と物との関係に一定の距離をおきながら、物を介して人と、人を介して物とかがかわるといふ、いわゆる「三項関係」が形成されたと考えることができよう。

ボールを介した遊びの変化として、① 物と自己の関係から人を組み込んだ三項関係が成立したこと、② 自己と物との関係が直接的な段階から間接的な段階へと移行したことを指摘できよう。これらの発達的变化の背景として、① 人見知り、母子分離を経て母親以外の第三者との情動的交流が豊かになってきたこと、② 立位姿勢による移動が自由にできるようになり、行動空間が拡大され空間認知の地図ができつつあること、③ ボディ・イメージの形成により、自己と他者、事物との関係把握が容易になったことなどがあげられる。

#### IV. ま と め

話しことば獲得前期の盲幼児に対し、インリアルによる言語指導を試みた結果、若干の知見が得られたので以下にまとめて記しておきたい。

1. 子どもと大人の相互交渉過程の分析の結果、子どもから開始した長パターンの著しい増加と短パターンの消失が認められた。また、子どもの意図的伝達行動の出現率も有意に増加した。これらの事実は子どもの主導権のもとに大人が反応的にかかわることができるようになった結果であり、また、相互のコミュニケーション関係の質的发展を物語るものである。

2. 大人の行動傾向の分析の結果、受動的受容が減少し、展開・解釈的行動が増加した。これは大人が子どもの出しているさまざまなサインを敏感に読み取り積極的にかかわる力が形成されたことを示唆するものである。

3. 話しことば獲得前期の盲幼児の言語発達援助法として、インリアルは有効な方法であることが明らかにされた。

(付記) 本稿は日本特殊教育学会第25回大会(1987年)で発表した内容を加筆しまとめたものである。

#### 引 用 文 献

- 1) 花熊理子・他(1983), インリアル・セラピーによる母親指導の試み, 大阪教育大学障害児研究紀要, 第6号
- 2) 清原 浩, 内田芳夫・他(1984), 障害乳幼児療育における方法論的検討, 鹿児島大学教育学部研究紀要, 第

## 35巻

- 3) 竹田契一, 田中裕美子, 里見恵子(1982), ことばの遅れた子どもへの言語指導——INREALセラピーによる指導——, 子供の城協会
- 4) 竹田契一(1983), 言語発達遅滞児指導の最近の動向, インリアル・セラピーについて, 特殊教育学研究, 第21巻(3)
- 5) 辰野俊子・他(1979), 言語行動の発達(II), 東京大学教育学部紀要, 第19巻
- 6) 内田芳夫, 有村多代子(1986), 発達遅滞児の言語指導に関する研究——インリアルによる事例報告——, 鹿児島大学教育学部研究紀要, 第37巻